



1. I 区河川底面全景（南東から）



2. I 区河川土層（東から）

図版2



1. II区河川底面全景（南から）



2. III区全景（北から）



1. IV区全景（東から）



2. IV区南壁土層（北東から）

図版 4



1. I 区上層検出面動物足跡痕



2. I 区底面スサ状織物出土状況



3. I 区杭列A（西から）



4. I 区杭列A（南西から）



5. I 区杭列C-4(458 北から)



6. II 区河川底面瓦出土状況



7. I 区底面遺物出土状況



8. II 区杭列F（南から）



1. III区 SD1002土層(北から)



2. III区SD1001 (東から)



3. III区 SD1001土層 (東から)



4. III区杭列H (北東から)



5. IV区トレンチ土層(東から)

図版6



1. IV区杭504～512（北から）



2. IV区出土スサ状木器(I-34)



3. IV区杭530（東から）



4. IV区杭533周辺（東から）



5. IV区杭538周辺(東から)



6. IV区ヤナ状木組み(北から)



7. IV区ヤナ状木組み(北西から)



8. 河川底面下ヒツバタゴ出土状況

## 大橋E遺跡第11次調査

### 1. 立地と歴史的環境 (Fig. 49)

大橋E遺跡は、福岡平野を貫流する那珂川左岸の中流域に拡がる沖積地の微高地上に立地する。二十世紀初めの旧地形図によれば、西には油山山塊から派生した低丘陵が延び、丘陵の東には那珂川が形成した沖積地が拡がっていた。この沖積地には一面に水田が拡がり、その間に村々を繋ぐ狭い生活道路が幾筋も通っていた。油山山塊から派生して那珂川に添うように延びる低丘陵上には、老司古墳や卯内尺古墳を始めとする前方後円墳やそれを取巻く老松神社古墳群、卯内尺古墳群、瓦窯の老司古代瓦窯跡や三宅瓦窯跡、三宅岩野瓦窯跡と三宅庵寺跡がある。殊に老司瓦窯跡は、観世音寺に葺く瓦を生産した瓦窯であり、三宅庵寺は7世紀～9世紀初めまで続く方一町の古代寺院跡で、瓦や埴のほかガラス製品や輸入陶磁器、石製道具のほか銅製の匙や箸が出土している。一方、沖積地上には、大橋E遺跡を始め、三宅A・B遺跡、野多目A～C遺跡、老司A・B遺跡が展開している。

大橋E遺跡では、昭和61（1986）年の第1次調査以来、10地点で発掘調査が実施され、弥生時代～古代、中世までの遺構から、細型銅劍の鉄型や、朝鮮系無文土器、輸入陶磁器などが出土している。

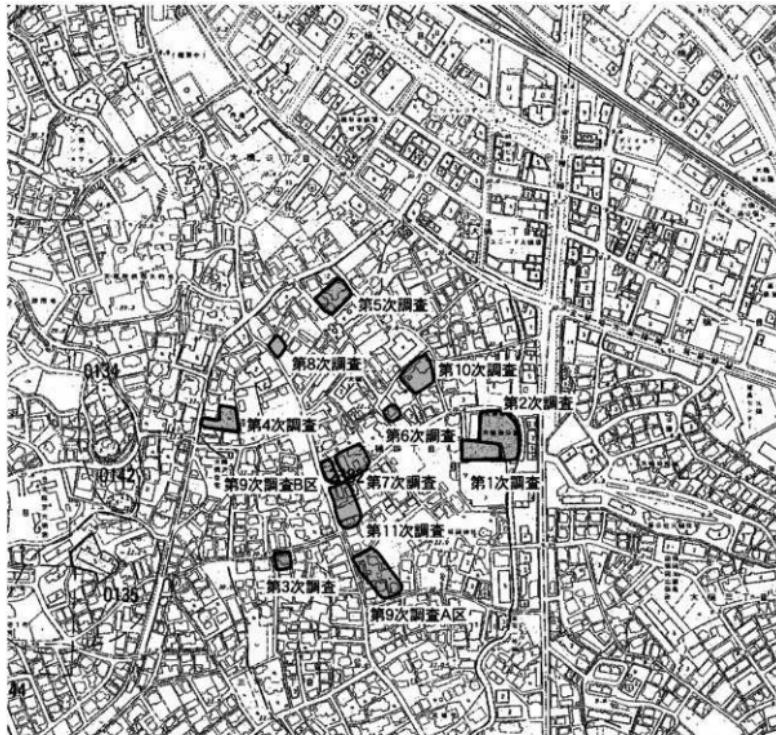


Fig.49 大橋E遺跡位置図 (1/5,000)

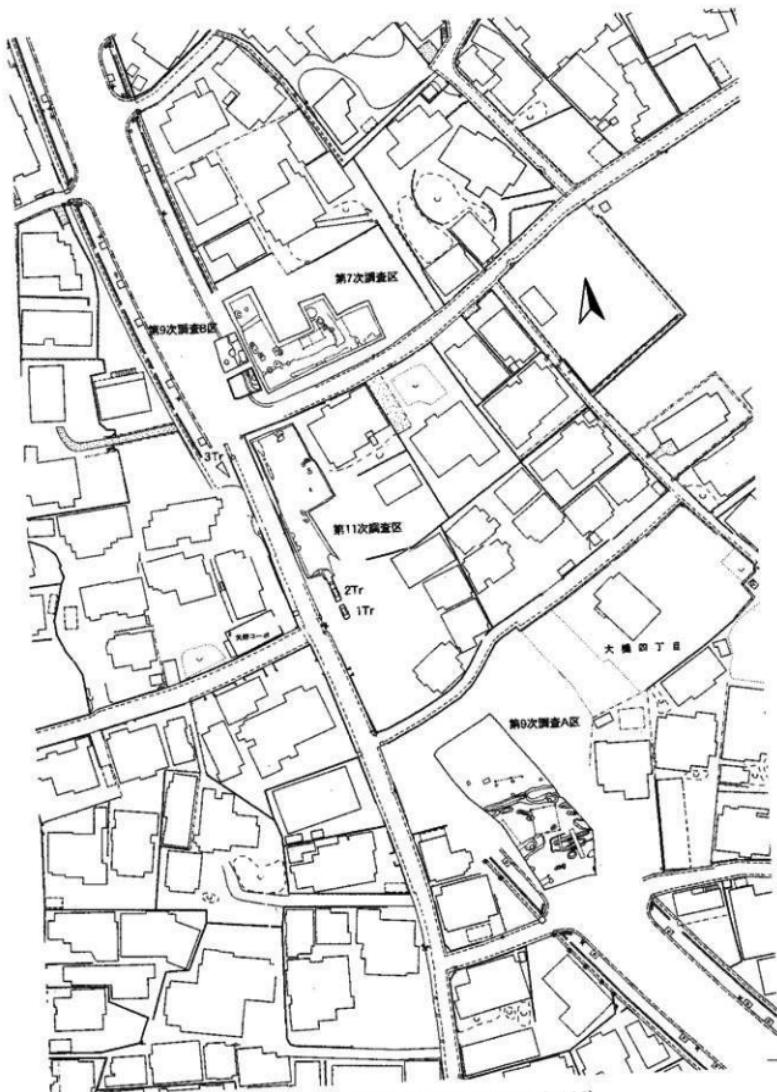


Fig.50 大桶E遺跡第11次調査区位置図 (1/1,000)

## 2. 調査の記録

### 1. 調査の概要 (Fig. 50~52 図版7)

玄界灘に面した福岡平野は三方を背振山系から派生する山塊に囲まれ、博多湾に向かって北流する御笠川と那珂川の二つの流域には広大な沖積地を形成している。平野の西を北流する那珂川の左岸には、油山山塊から派生する低丘陵が延びて福岡平野と早良平野を画している。

大橋E遺跡は、平野の西を流れる那珂川左岸の中流域に拡がる沖積微高地に立地し、南には、開析谷を挟んで三宅A・B遺跡や野多目A~C遺跡が連なっている。大橋E遺跡は、これら南北に連なる沖積微高地群の北端に位置する東西が325m、南北が535mの楕円形の空間に営まれた弥生時代から中・近世に亘る遺跡である。第11次調査区は、この大橋E遺跡の中央部に位置し、調査区の北には第9次調査区B区と第7次調査区があり、開析谷を挟んだ南には第9次調査区A区がある。

第11次調査区は、第9次調査区のA・B区に挟まれた東西幅が20m、南北長が70mの範囲が発掘調査の対象地であり、北部では遺構が検出されていた。一方、南端部(150m<sup>2</sup>)は、第9次調査A区の所見から開析谷にあたり、調査の対象外となっていた。この両区に挟まれた南部の(400m<sup>2</sup>)は、既存家屋の解体前で、解体後に発掘

調査と並行しながら試掘調査(1・2トレンチ)を実施したが、遺構は検出されず、調査対象地外とした。また、北側調査区と旧道を挟んだ西側の三角地は、舗装工事が終わっていたが3トレンチを設定して遺構の確認を実施した。しかし、用地の狭小さと深さで遺構面を確認できず、発掘調査は不可能と判断した。

発掘調査は、北から着手したが、調査区内にある生活道路確保の必要性から、南北に二分して実施することになった。更に、排土処理の必要から南北に二分して実施し、その終了を待って生活道路を付け替えて残る南部の調査をすると云う煩雑な調査となった。

発掘調査では、土壌6基、溝1条と多数のビットを検出したが、建物跡としてはまとまらなかった。

### 2. 基本層序

本調査区の現況は宅地であるが、GL下60cmで灰褐色土の旧耕土に達する。旧耕作土の層厚は15~25cmで基盤層の黄褐色ローム層に

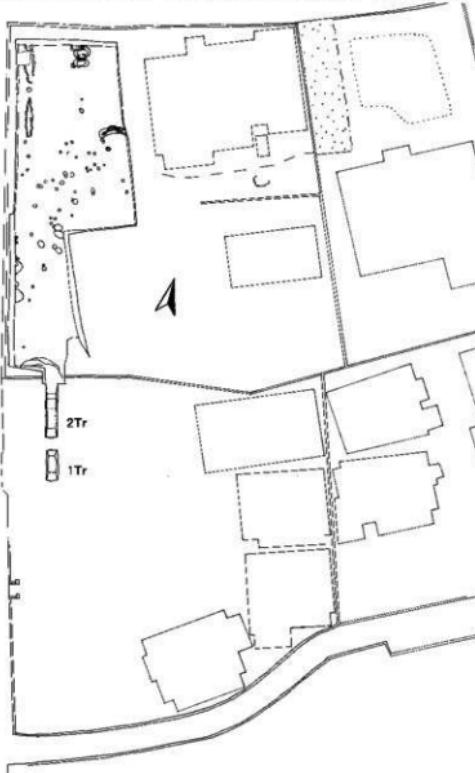


Fig.51 大橋E遺跡第11次調査区周辺現況図 (1/500)

達する。北側の1トレンチでは、耕作土下に暗茶褐色土層が南へ向かって薄く堆積している。しかし、2トレンチではこの暗茶褐色土層は確認されず、GL下80cmで茶灰色砂層となり、灰白色粗砂層～茶色粘砂土～灰色粗砂層～淡茶色粗砂層～灰白色粗砂層～茶色粘砂土と続き、GL-240cmで茶色砂礫層に至る。この2トレンチと第9次調査区A区を繋ぐ30mの間には東から開析谷が彎入している。

### 3. 土 壤 (SK)

土壤は、6基を検出した。プラン的には円～椭円形を呈するが、出土遺物が少なく、その機能および明確な時期は特定し難い。その分布も2～4号土壤が重複するほかは散逸的である。

#### 2号土壤 (Fig. 54 図版8・9)

2号土壤は、調査区の北端に重複する2～4号土壤中の中央部にあり、土壤中で最も古く、北側壁は4号土壤に、南側壁は3号土壤に切られている。平面形は、長辺が165cm、短辺が120cmの長楕円形プランをなす。主軸方位はN-68°-E。深さが42cmの壁面は緩やかに立ち上がり、両側壁には壙底から10cmの高さに半月形～椭円形の小さなステップを付設している。壙底は浅い凹レンズ状をなし、断面形は舟底状をなす。覆土は、暗灰褐色土で壙底には暗茶褐色土が薄く堆積していた。須恵器甕や土師器、瓦器鉢、陶器甕の小片が出土した。

#### 3号土壤 SK-03

(Fig. 54 図版8・9)

3号土壤は、調査区の北端に重複する2～4号土壤の中で最も南に位置し、北側壁は2号土壤を切っている。平面形は、長辺が150cm、短辺が95cmの

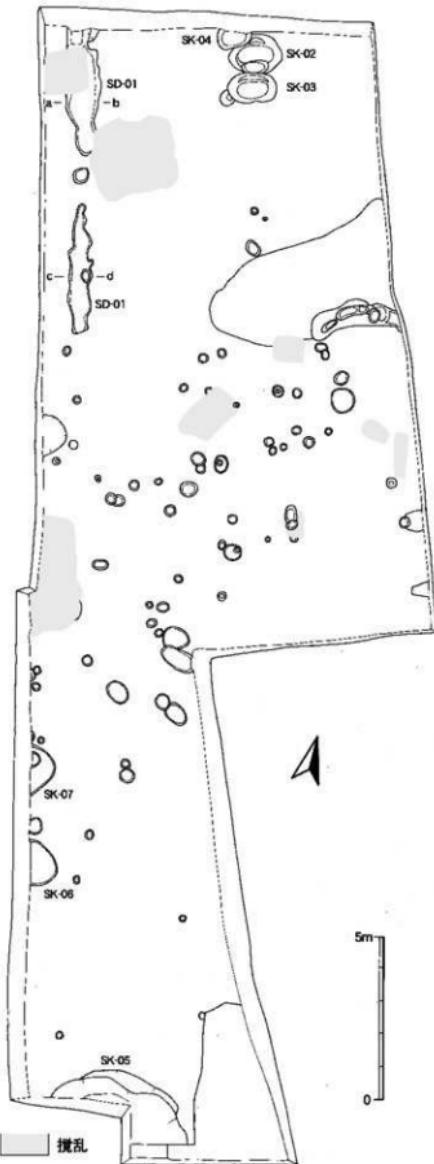


Fig.52 遺構配置図 (1/150)

梢円形プランを呈し、主軸方位をN-76°-Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、北側壁には、長さが95cm、奥行きが12cmの狭いフラット面が付く。深さは48cmで、断面形は逆台形をなす。覆土は、灰黒色土の單一層である。遺物は出土しなかった。

#### 4号土壤 SK-04 (Fig. 54 図版9)

4号土壤は、調査区北端に重複する土壤中で最も北側に位置する東西軸の土壤で、南側壁は2号土壤の北西壁を切っている。平面形は、主軸方位をN-64°-Eにとる

長辺が110cm、短辺が75cmの梢円形プランになろう。深さが30cmの壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は、黄褐色ロームブロックを含む暗茶褐色土の單一層で、壙底にはロームブロックを含まない茶褐色土が薄く堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### 5号土壤 SK-05 (Fig. 55 図版9)

5号土壤は、調査区南端にある大型の土壤である。平面形は、長辺が440cm、短辺が280～300cmの梢円形プランになろう。主軸方位は、N-82°-Eにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は45cm。壙底は西にむかって緩やかに傾斜し、逆台形の断面形をなしている。覆土は、厚い上層が黄褐色ローム粒を含む明茶～茶褐色土。壙底には暗茶褐色土が薄く堆積し、遺物は未出土。

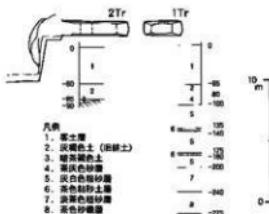


Fig.53 土層柱状模式図 (1/400)

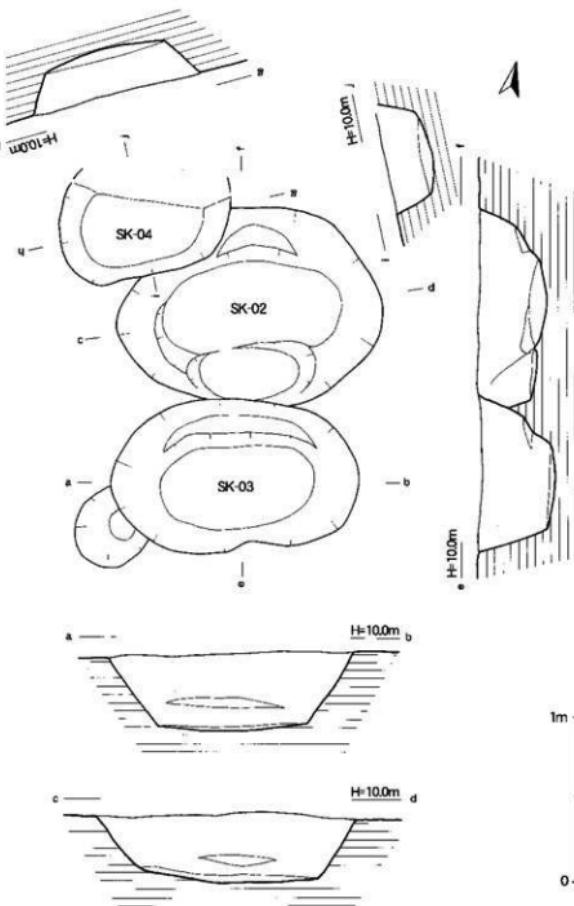


Fig.54 2～4号土壤実測図 (1/30)

### 6号土壤 SK-06

(Fig. 52)

6号土壤は、調査区の南西端に位置する土壤で、すぐ北には7号土壤がある。西半部が調査区外に拡がるが、平面形は長辺が145cm、短辺が125cmの梢円形プランになろう。削平が著しく急峻な壁面は深さが5cmと浅い。壙底は平坦である。覆土明茶褐色～茶褐色土の単一層で、遺物は1点も出土しなかった。

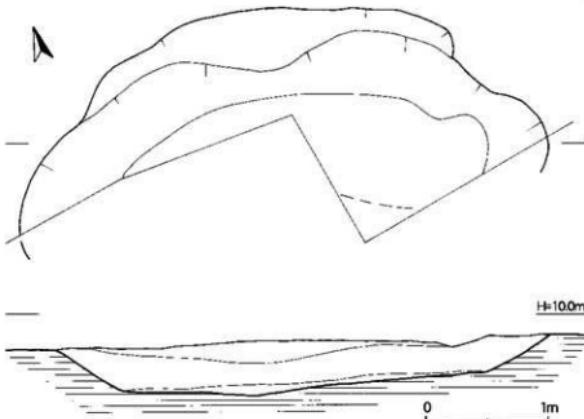


Fig.55 5号土壤実測図 (1/40)

### 7号土壤 SK-07 (Fig. 52)

7号土壤は、調査区の南西端にある土壤で南には6号土壤がある。西半部は調査区外に拡がるが、一边が150～180cmほどの不整円形あるいは隅丸方形プランになろう。削平が著しい壁面は深さが8cmと浅い。覆土は、明茶褐色土の単一層で、遺物は未出土。

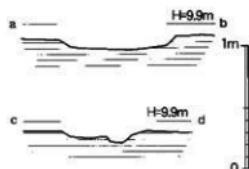


Fig.56 1号溝断面図 (1/40)

### 4. 溝造構 (SD)

溝造構は著しく削平された1条を検出したが、詳細は不詳。

#### 1号溝 SD-01 (Fig. 56 図版10)

1号溝は、調査区の北西端部を直線的に南北流する溝である。溝幅は南側が45cm～70cm、北側は95cm～110cmで北端部には、15cmほどの段差がある。深さは南側が5cm、北側が10cm～25cmで、北にむかって低くなる。また、削平によって溝の途中は150cmほどが途切れている。溝底は浅い凹レンズ状をなす。覆土は茶～暗茶褐色土の単一層で、遺物は土師器と須恵器小片が出土した。

### 3. 小結

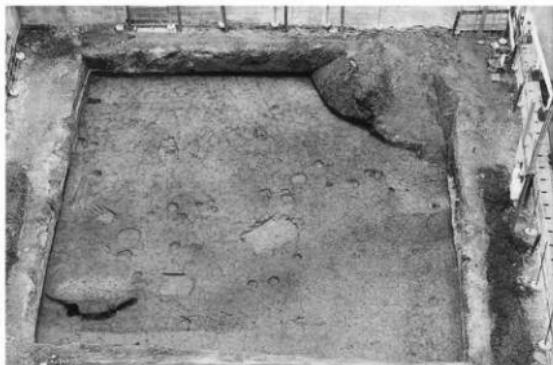
第11次調査では、土壤6基と溝造構1条のほか多数のピットを検出した。ピットの中には柱痕跡を残すものも幾つかあるが、ひとつの建物跡としてはまとまるものはなかった。検出した造構は、調査区の北側にやや偏って分布する傾向がある。北接する第7次調査区や第9次調査区では、周囲を溝で囲繞する屋敷地があり、その中からは建物跡や井戸跡、土壤等が検出されている。第9次調査区B区では、溝が一時的に埋め戻されて陸橋状になっており、出入り口とも示唆されている。時期的には15世紀から17世紀初頭である。本調査区で検出した土壤や溝造構は出土遺物が乏しく、明確な時期は判断しがたいが、細片の中にはこの期のものもあり、同屋敷地周辺の造構として捉えることができよう。また、調査区が第9次調査区A区との間に蠒入する開析谷にむかって緩やかに傾斜することを勘案すれば、南側に造構が希薄になっていくことも十分理解できよう。



調査区全景（北から） CG合成



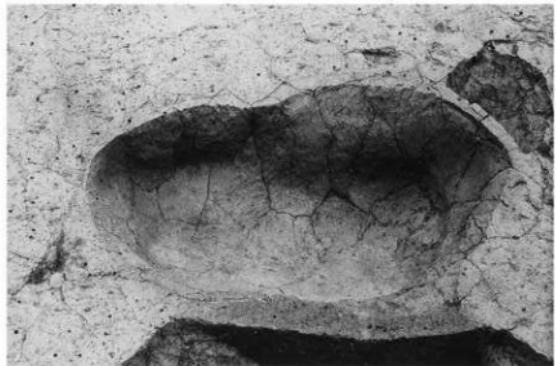
1) 調査区北側全景（北から）



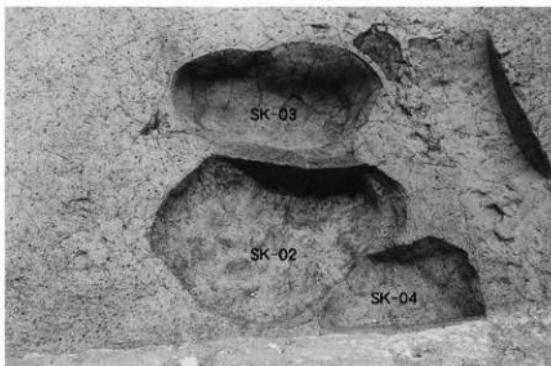
2) 調査区中央部全景（北から）



3) 調査区南側全景（南から）



1) 3号土壤（北から）



2) 2~4号土壤（北から）



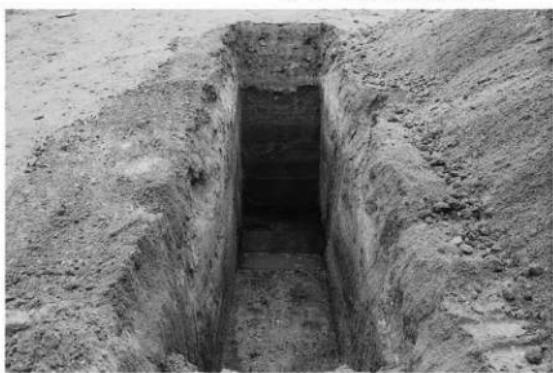
3) 5号土壤（北東から）



1) 1号溝（南から）



2) 2トレンチ全景（北から）



3) 1トレンチ全景（北から）

## 報告書抄録

書名 笠抜遺跡2－第3次調査報告－／大橋E遺跡7－第11次調査報告－  
副書名 都市計画道路長浜太宰府線関係埋蔵文化財調査報告  
巻次 笠抜遺跡 第2巻 / 大橋E遺跡 第7巻  
シリーズ名 福岡市埋蔵文化財調査報告書  
シリーズ番号 1071集  
編集著者 屋山洋／小林義彦 編集機関 福岡市教育委員会 発行機関 福岡市教育委員会  
作成法人ID 40134 発行年月日 2010年3月23日  
郵便番号 810-8621 住所 福岡市中央区天神1丁目8番1号  
電話番号 092-711-4667

所収遺跡名 笠抜遺跡第3次  
ふくおかけんふくおかしみなみくよこてみなみ  
所在地 福岡県福岡市南区横手南18  
コード 市町村 40134 遺跡番号 2811  
北緯 33° 32' 39" 東経 130° 26' 28"  
調査期間 20080410～20080909 調査面積 504 m<sup>2</sup>  
調査原因 市道新設 種別 宅地・田畠  
主な時代 弥生時代前期／弥生時代中期～古墳時代前期／古墳時代後期～古代／中世  
主な遺構 溝 2条(弥生前期、古代)／柱穴 多数／井堰 古代末～中世  
主な遺物 弥生土器、土師器、須恵器、瓦器椀、白磁碗、青磁皿、瓦、土製品、石製品、

所収遺跡名 大橋E遺跡第11次  
ふくおかけんふくおかしみなみくおおはし  
所在地 福岡県福岡市南区大橋4丁目地内  
コード 市町村 40134 遺跡番号 2382  
北緯 33° 33' 15" 東経 130° 25' 35"  
調査期間 20071120～20080121 調査面積 380 m<sup>2</sup>  
調査原因 市道拡幅  
主な時代 中世～近世  
主な遺構 土壙、溝  
主な遺物 土師器、須恵器、国産陶器、瓦器

福岡市埋蔵文化財調査報告書1071集

## 笠抜遺跡2・大橋E遺跡7

2010年(平成22年)3月23日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 巧文社印刷株式会社